

ゾムバルトの學史的地位

一 マーシャルとゾムバルト

ドイツ經濟學の巨星ゾムバルトの訃報についてはすでに逸早く我が國に報ぜられてゐる。私はこの碩學を追悼するためにこゝに未熟な一文を草することができたことを無上の光榮だと考へてゐる。

十九世紀から二十世紀にかけてその學問的生涯を營み、それぞれその國固有の學問的傳統のなかに生き抜いて、現代經濟學の最高水準を畫した二人の經濟學者を求めらば、恐らく人はアルフレッド・マーシャルとウエルナー・ゾムバルトの名をあげるのに躊躇しないであらう。マーシャルは周知の通り、イギリス經濟學の傳統のなかで、古典經濟學の新たな解釋の上にこれを限界利用學派と結びつけるのに成功した。そしてやゝともしれば忘れられ易いことであるが、マーシャルはイギリス人の着實な、粘着力のある經驗主義的探求欲をドイツ精神の規模、

の廣大さとも結びつけることを決して忘れはしなかつた。こゝに單なる理論家の水準を遙かに凌駕するところの、優れた綜合家マーシャルの偉大さが横はつてゐたのである。これに反してゾムバルトはドイツ經濟學の子であつた。彼の體内にはドイツ的「精神」が屯してゐた。けれども新歴史學派の嚆將グスタフ・フ・シュモラーに育まれたゾムバルトにとつては、ドイツ精神の思辯性は決して實證に即した細目的研究と無縁のものではなく、むしろ巨匠ゾムバルトの手にかゝつては、それが美事な構想力及び構成功のうち、心にくきばかりの成果を收めたのである。そして彼においては、英佛流の合理理論と雖も、決してこのやうな構成功の埒外に放逐されることは許されなかつた。かくてマーシャルは經濟學のイギリス的地盤の上で、ゾムバルトは經濟學のドイツ的地盤の上で、同一の、太い基本線を歩いたものといふことができるであらう。マーシャルの偉大さに匹敵し得べきゾムバルトの卓拔さも亦何よりこゝにあつたのである。

ゾムバルトの學史的地位について語るには、現在のところ餘

一橋論叢 第八卷 第一號

りにその時期が早い。なぜならば彼はなほ我々と共に文字通り生きてゐるからである。しかし彼の半世紀にわたる學問的生涯は今や永遠にその幕を閉ぢ、彼の才氣溢るゝ才筆はもはや永久に動かなくなつた。だからたとへ彼の學史的地位について語るのは早急にすぎるとしても、今彼の學風について學問的反省の機因を造り出してゆくのも強ち無理ではあるまい。そしてこのやうな意味でゾムバルトの學史的地位について語るために、マールシアールとの類比を今少しく續けてゆくのも、必ずしも興味が無いことではない。

政治經濟學といふ傳統的な用語の代りに、簡単に經濟學 (Economics) といふ用語を選び、經濟學の研究主題を人間生活との關係における富 (Wealth) の研究にあるとしたところにマールシアール「經濟學原理」の根幹が存することは、普ねく人の知るところである。マールシアールがこのやうな措置によつて期したところは、恐らく、一方では經濟學の純科學的性情を守り通すと同時に、他方ではこの學問を溫い人道主義的息吹きで活氣づけようとしたのであるといひ得るであらう。經濟學が光と共に熱を求めたものであり、またさうでなければならぬことが、そこに示されてゐた。それと同様に、ゾムバルトにとつても經濟學はもはや國民經濟學 (Volkswirtschaftslehre) ではなくて

單に外來語の經濟學 (Nationalökonomie) または社會經濟學 (Sozialökonomie) であり、またさうでなければならなかつた。しかしゾムバルトがかう考へたのは、もちろん、熱のない光を求めたためではなくて、たゞ熱のために光の分析が妨げられることを恐れたためであつた。彼が「社會政策の理想」においてその師シュモラーを批判しなければならなかつた一つの理由がそこにある。そして彼が「價値判斷論争」においても、シュモラーに背きマックス・ウェーバーにつかなければならなかつた理由も亦、そこにあるといへるであらう。けれどもこの故に、人はマールシアールの人道主義的息吹きが、人間ゾムバルトの彼方にあつたなどと速断してはいけない。ドイツ歴史派經濟學の實踐的傳統、わけても若い時代のゾムバルトをこの傳統に即して動かしたその學問的情熱は、人のこのやうな速断を簡単に打破してくれるのである。かくてマールシアールとゾムバルトとは、それぞれイギリス的及びドイツ的な風格を異にしながら、しかも經濟學及び經濟學者の主要要件を具現した點では完全な一致を示してゐた。そしてそれは一般に十九世紀から二十世紀へかけての、經濟學の最高の發展段階、最新の發展線を表はしてゐたのである。

二人の碩學のこのやうな一致は、もちろん決して偶然の一致

であり得るはずがない。我々は一方では、リカアドヤミル以後イギリスで低回してゐた「政治經濟學」が、まづイギリスの内部分ではデエヴォンスにより、さらにイギリスの外からはワルラスやメンガーによつて、いかに清新の活氣を吹き込まれたかを知つてゐる。マーシアルはそこに現はれてきた。我々はまた他方では、ミュラーヤリスト以來の國民經濟學が、いかにしてクニースによつて方法的に洗練され、いかにしてシュモラーによつて實踐化され、またいかにしてメンガーによつて批判され、たかを知つてゐる。ゾムバルトは即ちそこに現はれてきた。そしてドイツ精神の神祕性がヘーゲル精神の有體的發展思想によつて具象化されたものと見ることが許されるならば、イギリス精神の直裁性はダーウニズムの自然主義的進化思想によつて表徴されたといひ得るであらう。だから我々がマーシアルのうちにこのやうな進化思想の鑛脈を見出し、ゾムバルトのうちでこのやうな發展思想の斷層を見出すことができるといつたところで、それは決して單に對照の便宜に藉口した附會の説ではないのである。そしてもつと肝心なことは、この二人の碩學がこのやうな時代思想の頂點に立ちながら、經濟學の原理乃至體制を純粹なものとして捉へようとした點であつて、それは正にメンガーやワルラスやデエヴォンスを産み落した時代の西

消 息

歐經濟文明の一般的特性を表示するものであつたのである。けれども我々にはやはりマーシアルとの類比をこれ以上続ける必要を見ない。より多くゾムバルトについてゾムバルトを語ることにしよう。

二 類型と段階と體制

ゾムバルトがマックス・ウェーバーと共に、「社會科學及び社會政策紀要」(Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik)の創設者であることは人の知る通りである。この雜誌の建前は、ウェーバーが同誌に發表したその有名な論文「社會科學的認識の客觀性」で明かにしたやうに、社會科學及び社會政策上のいかなる傾向からも自由に、不偏不黨な、純科學的な立場を持つことにその生命があつた。ウェーバーはこのやうな純科學的立場がいかなるものでなければならぬか、いやむしろいかなるものであるの外はないかといふことを論證しようとした。ウェーバーのこの所論に對しては、今日もちろん色々の反對論が起り得る情勢となつてはゐるものの、それは確かに社會科學者が一度は潜らなければならない煉獄の火であつた。「理想型」の構想がこのアスケーゼの産物であつたことは餘りに周知の事實である。そしてこの構想が、シュモラーとメンガ

一 橋論叢 第八卷 第一號

一との方法論争に終局的な解決を與へようとしたものであり、或ひはまたそれと同じことであるが、ディルタイとリッカードの對立を止揚しようとしたものであつたことも、それほど耳新しい事實ではない。ゾムバルトはその點で悉くウェーバーと協働することができた。しかしそれは理想型が單なる類型ではないといふ消極的な側面の關する限りであつた。なぜならば同じ理解的方法をとつても、ゾムバルトの體制概念とウェーバーの理想型概念とは、積極的側面での意味するところがかなり著しい相違を含んでゐるからである。

理想型も體制も共に單なる類型ではなく、そのうちに歴史的個別的なるものを止揚してゐる。しかし理想型は段階概念から全く遮斷されてゐるのに、體制は段階概念と秘かな契りを結んでゐる。歴史を段階的に見るといふことは、正しいにせよ正しくないにせよ、一つの實用主義的態度からきてゐることであるが、ウェーバーはもちろん斷固としてかゝる實用主義的態度を拒否してゐる。これに對してゾムバルトも、彼が價値自由の立場を持つる限り、ウェーバーと共にこのやうな歴史實用主義の非科學性を盲信するものではないことはいふまでもない。しかしゾムバルトの體制概念は、歴史派經濟學の經濟發展段階説を、もはや實用主義的な固陋さをもつてではなく、精神科學的な洗

練さをもつて活用するものであると見ることもできるであらう。例へば、彼のいはゆる「經濟時代」が、初期資本主義から高度資本主義を経て後期資本主義へ移行するものと見られたとき、一資本主義體制のこのやうな三つの時期は、いはゞ發展段階ならざる段階として把握されてゐることは斷言するに難くない。そこにウェーバーのフラグメンタリズムとは違つて體系家ゾムバルトの面目があるともいへよう。そしてウェーバーにおいては理想型が結局歴史把握の手段にすぎなかつたのに對して、ゾムバルトにおいては體制は歴史的理論の根幹をなしてゐたことが想起されてよい。ウェーバーにおいては社會學は結局歴史の婢僕たらうとした。しかるにゾムバルトにおいては社會學は歴史と理論の統一を意味してゐた。ウェーバーの「經濟と社會」が結局のところ經濟と社會であるの外はなかつたのに對して、ゾムバルトの「近代資本主義」は經濟學と社會學との歴史における結合、即ち「經濟社會學」の一見本となることのできた。我々はこゝにドイツ經濟學史におけるこれら二人の巨人の差異を、即ち理想型と體制概念との學史的差異を、看取してしかるべきである。

かくてゾムバルトはウェーバーとゴットルとの中間的な地位を占めてゐるやうに思はれる。人はウェーバーの側からゾムバ

ルトの不徹底をなじることでもできるであらうし、またゴットルの側からゾムバルトの認識論的殘渣を剔抉することもできるであらう。それは現在及び將來の經濟學をさらに考へてゆかうとする者にとつて極めて重要な問題を提示してゐる。しかしそれ故にこそゾムバルトが、たとへ問題のオーメガではないとしても、アルファであり、しかも唯一のアルファであると稱し得べき理由があるのである。我々は經濟學の過渡期的現狀に顧みてこのことを特に強調する必要を認める。

三 三つのイデオロギー

こゝで三つのイデオロギーといふのは、單に三個のイデオロギーといふ意味ではなくて、「三」についてのイデオロギーといふ意味をも含ませてゐる。しかしさうした用語法は随分主觀的な無理を伴つてゐるから、些か釋明の必要があるであらう。ゾムバルトが「三つの經濟學」で、規正的經濟學と整序的經濟學に對して理解的經濟學の立場を明示し、資本主義體制の構成要素として「精神（經濟心意）」と「形式（組織）」と「技術」をあげてゐることは、彼の經濟學即ち經濟社會學がやはりヘーゲル精神の三法式に準據してゐることを示してゐる。論理の形式上もし二といふ偶數が對立と運動を表はすものとすれば、三

といふ奇數はその統一と調和を表はしてゐる。だから古來三といふ數の有する調和感は論理的思惟の支柱として極めて重大な役割を果してきた。特にそれがドイツ・ロマンティックの根本性格と結びついてゐたことは人のよく知るところである。ゾムバルトの藝術家的氣質はこのやうな三進法への温床であつた。けれどもゾムバルトにはミューラーに見られたやうな「對立論」もなく、ヘーゲルに見られたやうな辯證法的發展の形而上學などはあり得ない。彼は社會科學者として經驗的立場をあくまでも重んじてゆかうとするからである。けれどもすべて經驗論はそのまゝで一つのイズムやイデオロギーではあり得ないのであるから、ゾムバルトも亦最後の統一者を必要とする。そしてこの最後の統一者が彼の一見明快なる理解的把握の背後に、直觀的に與へられてゐたことが最も肝心な點なのである。かくて三つの契機は三つの類型となり、三における統一は分類的統一でしかあり得ない危険を示すことになる。尤もゾムバルトの巨腕はそれほど簡單にその統一實現上の破綻を露呈することはないが、しかしそれは彼自身のいふ通り、彼の方法よりも彼の才幹と情熱に基いて初めて美事な成功を収めたものといひ得るのである。けれどもその成功が局部的に美事であればあるほど、全體としての破綻を如何ともすることのできないところに

論理の峻厳なる復讐が現はれてゐる。我々はそこで學者としてのゾムバルトとイデオログとしてのゾムバルトの關係について、彼の思想的地位を判定してをかなければならない。

思想家ゾムバルトの産褥には恐らく自由主義的人道主義の母が臥してゐたといへるであらう。しかし彼の名付親は社會主義者の血統を持つてゐた。このことからゾムバルトは國民主義や全體主義の同僚には受入れられ難い素性の持主であるかの感を與へた。讀者はさきにのべたマーシアルとゾムバルトの類比を想起されるがよい。さらに讀者は若き時代のゾムバルトの不遇を想起されよ。それはかりではない。一九三一年ナチスが政權を掌握すると共にゾムバルトはベルリン大學の玉座を退かざるを得なかつた。かうした生涯のエピソードはゾムバルトの思想的地位を論ずる場合には決して輕々に看做されてはならない。

しかしそれにも拘らず、一九三三年彼が七十回の誕生を迎へるに當つて、ゾムバルトはドイツ經濟學最高の權威として國をあげて祝福されることができた。この祝福にはもちろん政治的意味が多分に含まれてゐたかも知れない。よく考へて見ればゾムバルトは結局ナチスの學者ではなかつたかも知れない。しかしこのやうに政治的なものと結びつくことができるところに、我々は單に時代に動かされる老大家の姿を見るだけでなく、さら

に時代に積極的に結びつかうとする人間ゾムバルトの本性を見なければなるまい。そしてゾムバルトの統一感はいつでもこのやうなものに結びつくことのできる非合理的な弾力性を缺いてはゐなかつた。

だからゾムバルトは思想家として、その生涯の間に何度も動搖し轉身したといふ非難は、これをマーシアルの着實さに比較していへば必ずしも當らないわけではなからうが、しかしやはりそれはゾムバルトの人爲とゾムバルトの理解的方法を眞に理解してゐないことからくる非難であるといへるであらう。自由主義と社會主義と國民主義の對立と統一、こゝに人はゾムバルトにおける「三つのイデオロギー」の謎を見出すことができると思ふ。

四 ゾムバルト研究書目

ゾムバルトの生涯、活動その業績、學問體系、ゾムバルト研究書目については J. Plotnik : Werner Sombart and his Type of Economics, New York 1937. が最も手頃な文献としてあげられよう。ゾムバルトと社會主義との關係については

A. Nitsch : Sombarts Stellung Zum Sozialismus, Leipzig 1931. を彼の近代資本主義論の研究のためには G. A. Geiss:

Die wirtschaftstheoretischen Grundlagen des Modernen Kapitalismus von Sombart, Jena 1931. 及び F. Nussbaum: A History of the Economic Institutions of Modern Europe. An Interpretation to Der Moderne Kapitalismus of Werner Sombart, New York 1933. をあげることができよう。それからゾムバルトの生涯七十年を記念したシヌモラー年報一九三三年版は彼の學界における最後の偉容を傳へるものとしてよき資料であらう。邦語で手にし得る文献書目としては戸田武雄譯「社會政策の理想」(昭和十五年有斐閣)中に、譯者の手によつてゾムバルトの生涯並びにゾムバルト文献書目が大體網羅されてゐるから讀者には便利であらう。但し戸田氏の解説は前掲プロトニクによつたものである。ゾムバルトの書物は邦譯されてゐるものも少くないが、それらは皆右の戸田氏譯

中に示されてゐるからこゝでは割愛することにした。ともかく碩學ゾムバルトの學問的生涯はこゝに終つた。それは恰かも西歐資本主義の終焉と期を一にしてゐるかの如くである。ゾムバルトを高く買ふ者も買はない者も、恐らく彼のうちに、西歐資本主義の産み落した最後の巨匠を見ることに同意を惜む者はあるまい。そしてマーシャルに厚生經濟學(ピグー)が續いたやうに、ゾムバルトには經濟社會學が續くと見たならば、この巨匠の學說史的地位を定めるのに効果の多い見識を提供するであらう。今後におけるゾムバルト研究の方向はこの目標に向つて進めらるべきものではなからうか。三つのイデオロギーではなく、一つのイデオロギーを新時代は求めてゐるのである。(高島善哉)